

## 中山京子『グアム・チャモロダンスの挑戦——失われた伝統・文化を再創造する』

羽谷 沙織

アジアにおける文化政策のなかで、とりわけ開発や観光の局面において、音楽や芸能が従来とは異なる形で解釈・消費され、その社会文化的意味や宗教的意味が変容することは、これまで数々の研究が指摘してきた。中山京子が『グアム・チャモロダンスの挑戦——失われた伝統・文化を再創造する』のなかで扱うマリアナ諸島のチャモロダンスもまた、スペインの植民地政策および第二次世界大戦後のアメリカ化の推進のなかで「文化的虐殺 (cultural genocide)」を余儀なくされ、その社会文化的意味は大きく変わってきた (21頁)。当該地域の政治・経済の変化がもたらす波に飲み込まれるように、チャモロダンスという概念は消滅の危機にさらされたものの、本書が目指すのは、そのように一度は社会の表舞台から姿を消したチャモロダンスが現在、確かに存在しているという現代的な事象である。12年にわたる参与観察を通して明らかにされるのは、地域行事、学校教育カリキュラム、ツーリズムの局面における「創られた伝統」としてのチャモロダンスの新しい意味付けである。

文化人類学的なフィールドワークを基盤としながら、中山はなかでも、聞き取り調査を主要な研究手法とし、チャモロダンスの主体である継承者・指導者・実践者に寄り添いながら筆を進めている。本書の構成は、以下の通りである。すなわち、第1章「創られた伝統としてのチャモロダンス」において、植民地支配の歴史を遡り、文化的虐殺によって失われてしまった文化の現状と再生について考察した。第2章「教育における広がり」では、戦後のアメリカ化によって衰退したチャモロ語が、1990年代に英語とともに公用語として認められ、チャモロ文化学習が重要視されるようになる政治性に着目した。急激に押し寄せたアメリカ的な価値観、便利さを求める消費主義や個人主義を優先する態度が広まるなかで、チャモロの価値観も揺らいだのである (54頁)。第3章「チャモロダンスの衣装・道具・楽器」では、そうした価値観のゆらぎのなかから、主体であるチャモロの人々が自文化を見つめ直し、再生を徐々に選び取る様を考察した。つづく、第4章「チャモロ・アイデンティティの覚醒」、第5章「マリアナ諸島、本土への広がり」、第6章「グアム・太平洋芸術祭とチャモロダンス」においては、再創造としてのチャモロダンスが浸透していくプロセスを検討

した。とくに、グアムで開催された太平洋芸術祭が単なる祝賀会に留まらず、チャモロ・アイデンティティの育成装置として機能したという指摘は、政治的なイベントを好機と捉え、当事者であるパフォーマーたちが主体性を取り戻す企図として自らのために利用した点において重要な意味を持っている (106頁)。第7章「チャモロダンスと観光産業」と第8章「創られた伝統的は根付くのか」においては、チャモロダンスをグローバル経済・観光化のなかでどのように位置づけるべきかという問いについて批判的に検討している。チャモロダンスのビジネス化や観光客相手の舞踊ショーはネオコロニアリズムへの加担という批判に対し、当事者の声を拾い反論を展開している (111頁)。グローバル経済・観光のコンテクストにおける文化の表象とは、ただ単に外国人観光客の間で人気を高め、商品として高く売れるよう、文化を客体化 (objectification) し、観光資源として有効活用することだけを意味しているのではない。それは、チャモロ文化の質を高めるという課題に向き合う機会であり、チャモロとはなにかについて改めて問う営為とも言えよう。

太田 (1998) は、観光開発のまなごしによって、ホスト社会における文化が商品化されるなかで「何をもって文化とするか」という問いが生まれると指摘した (70-77頁)。本書は、その「何をもって文化とするか」という問いに対して、植民地支配や文化的虐殺を経験したチャモロの人々がいかなる見解を示し、どのようにチャモロダンスを位置づけ直そうとしているのかの動態を丹念な聞き取り調査から明らかにしたエスノグラフィーである。舞踊研究者、地域研究者はもとより、それ以外の多くの人たちにも薦めたい。

(明石書店、2018年9月刊行)

### 参考文献

太田好信 1998. 『トランスポジションの思想』世界思想社.

## 森龍朗著『二人の舞踊家

—指導者服部智恵子 振付師島田廣—

川島 京子

今日に至る日本バレエ界の発展をその黎明期から常に中心で支えてきた服部智恵子 (1908-1984) と島田廣 (1919-2013)。本書の帯紙には「日本バレエ史上の“四つの山”を背負って歩いた二人」とあり、四つの山を「エリエナ・パヴァロヴァによるバレエの移植」(1925-1941)、「終戦翌年の

東京バレエ団『白鳥の湖』公演(1946)、「ポリシヨイ劇場バレエ公演と日本バレエ協会の設立」(1957)、「新国立劇場バレエの初動」(1997)としている。いずれも、日本バレエ界全体にとっての大きなメルクマールであり、二人はそのまとめ役を果たした。本書は、二人が戦中に発足した服部島田バレエ団に1954年に入門し、以来、二人の恩師とともに半世紀を歩んできた舞踊家・振付家である森龍朗が著したノンフィクションである。森にとっては『舞踊とバレエ―虚像による非言語コミュニケーション』(文園社、2011年)に続く二冊目の著書となる。

A5判736頁におよぶ分厚い本著の内容は、森も同行した1965年の渡仏(1969年までパリ芸術劇場バレエを中心に活動)を境に「服部・島田バレエ団」と「再出発」の二部に分かれ、時系列に沿って構成されている。服部と島田に関する書籍は何冊か出版されているが、この著書の特色は、単なる人物伝にとどまらず、また上記のような日本のバレエ界に対する貢献に焦点を当てただけでなく、両氏をあくまでも芸術家として捉え、それぞれ服部智恵子を「バレエ指導者」、島田廣を「バレエ振付師」という角度からアプローチし、二人の指導法や振付作品に光を当て、その背景に隠された舞踊思想を描きだそうとしているところにある。すでに服部智恵子の著書とされるものには、『服部ママ』口伝 バレエ花伝書―バレエを愛するすべての人に―(エーアイ、1990年)がある。これは服部の著書というよりも、服部の七回忌に出版された、彼女が過去に行ったバレエ講義録であるが、技法一つひとつの考え方や踊り手のために説いた作品における振りの解釈まで、服部智恵子のバレエ哲学が余すところなく語られた名著である。実は、この本を企画し編集したのも、服部の教えを漏らさず形にして残しておきたいと考えた森龍朗であった。したがって、本書でも、服部の指導法の詳細はもちろんのこと、今ではほとんど顧みられることのない島田作品について、その構想から演出振付の実際、さらに全作品を見渡しての作品分類や振付理念の分析が、森の目を通してなされている。

そしてもう一つの大きな特徴は、それらを描くにあたってのデータが極めて充実していることにある。島田廣の遺品には膨大な蔵書や資料、未発表のものを含む多くの原稿が遺されており、あらゆる資料には島田の書き込みがびっしりとなされている。著者はこうした資料のすべてを一つ一つ丹念に読み解き、約5年の年月をかけて本書にまとめた。したがって、当然、実際に記事になったものもあるが、これまで全く知られることなかった驚くような記述も多くある。なかでも、本書後半には、島田が新国立劇場舞踊芸術監督、日

本バレエ協会会長としての職務に粉骨砕身で取り組む姿が描かれているが、そこには、バレエ界の現状への辛辣な批判、決して実現されることのないこの国のバレエ教育の理想像がはっきりと示され、新国立劇場に対しては「自分の大切な時間を無駄に使ってしまった」と芸術監督を引き受けたことに後悔をし、日本バレエ協会に対しては大胆な「構造改革」を画策しながらも志半ばでこの世を去っていることがわかる。そして、最晩年には、「勲章をもらったり顕彰されるよりも、もっと振付家として認めてもらった方が嬉しかった」とつぶやいている。

新聞雑誌や公演パンフレットを含め、島田は多くの原稿を執筆してきた。しかし、「何か自己意志を表明したり、本当の心情を吐露するような文章を残すことにいつも躊躇がある」と、ついに自分のことは書かなかった。そして「(自分のことを)書くとしたら森君」と言い残していた。半世紀の長い道のりを共に歩み、すべてを見てきた著者は、「その無駄に使ってしまったと云う『自分の大切な時間』とは、本来『何を為すべき大切な時間』であったのだろうか」と考える。タイトルの「指導者服部智恵子 振付師島田廣」には、そんな三人の思いも隠されている。

最後に、これら島田廣の資料は今後整理分類された後に新国立劇場に寄贈される予定となっていること、現在、著者は三冊目となるバレエ技法に関する本を準備中であることを付け加えておく。

(文藝春秋企画出版部、2018年10月刊行)

## 山本順二『ロイ・フラー： 元祖モダン・ダンサーの波乱の生涯』

佐藤 真知子

本書は、19世紀末から20世紀初頭においてパリを中心として一大旋風を巻き起こした、アメリカ生まれの舞踊家ロイ・フラー(1862-1928)の生涯を、日本で初めて書籍化した一冊である。彼女の舞踊は、闇の中で大きな衣装のうねりに色彩照明を当て、幻想的な像を次々に浮かび上がらせるという独特のものであった。舞踊家の身体でも衣装でもなく「光」を主役にした新たな舞踊によりロイは、「光の魔術師」、「アール・ヌーボーの化身」と称され、今日、モダンダンスのパイオニアの一人として位置づけられる。そのような華やかな成功とともに、彼女の壮絶な苦悩や闘いをも生々しく描き、ロイの人間性に迫った点が本書の大きな特徴である。

著者は、元新聞記者で夏目漱石に関する著書の

ある、山本順二である。漱石のバリ滞在を扱った前著がきっかけで、当時大きな人気を博していたロイの存在を知り、本書の執筆につながった。ロイの回想記『私の人生の15年』（1908年）は、おおむね彼女が自身の舞踊を考案した29歳ごろから、回想記を出版した46歳ごろまでの時期について書かれている。著者は、時系列が等閑視され自由奔放に綴られたこの回想記を出発点とし、時間経過を整理した上で、事実関係の一つひとつについていねいに検討した。さらにロイに関する国内外の先行研究を比較・分析しつつ、回想記に記されていない時期にまで時間軸を拡張することで、彼女の生涯を追った。

本書は15の章から構成される。

第1章と第2章は、ロイのアメリカ時代、すなわち少女時代から渡欧前の29歳頃までの時期について書かれている。シカゴ近郊の農村で生まれたロイは、当初女優を目指し、アメリカの演劇界でキャリアを積む。そして29歳の時に、当時出演していた喜劇で催眠術のシーンを演じるにあたり考案した舞踊が、彼女の代名詞ともいえるべき「サーベントイン・ダンス（蛇のような曲がりくねったダンス）」の誕生につながったことが述べられている。

第3章から第5章は、ヨーロッパを中心とした、ロイの舞踊家としての活躍について描かれている。彼女のサーベントイン・ダンスはすでにニューヨークで大きな評価を得ていたが、30歳の時にパリに拠点を移し、ミュージック・ホールでデビューし大成功を収めた。この時期でもっとも印象的なことは、ロイが自身の舞踊の特許権を得るために、数々の訴訟を起こし闘った点である。これは抽象的な振付に対する著作権が主張された、きわめて早い時期の例であるといえる。ロイは自身の「発明」を守ることを試みるとともに、舞踊技術の習得、新たな照明技術の開発、そして舞踊の歴史研究に心を砕き、自身の舞踊をさらに深化させていった。

第6章から第10章までは、ロイの舞踊家にとどまらない幅広い活動、すなわち舞台演出家、振付家、興行師といった側面について描かれている。と同時に、彼女の交友関係にも焦点が当てられる。ロイは1900年パリ万国博覧会で、自身の名前を冠した個人劇場を開設するなどして、生涯を通して数多くの舞台を手がけた。それらの活動の中で、舞踊家イサドラ・ダンカンの才能を見出し、日本人女優の貞奴や花子をヨーロッパの舞台に押し上げた。ロイは、彫刻家のロダンや作家のデュマ、発明家のエジソンやキュリー夫妻、ルーマニアのマリー王妃らと親交があり、その交友関係の広さには驚くべきものがある。一方で、社会の最下層に位置づけられ、困窮に喘ぎながらも気高く朗らかに生きている人々を「人生の達人」とみなし、称

揚する姿は大変に印象的である。彼女の舞台人としての多彩な能力とともに、社会階級にとらわれずに誰に対しても分け隔てなく接する、ロイの人間観が伝わってくる。

第11章と第12章では、バリ万博閉幕後から第一次世界大戦終結までの、ロイの活動について描かれている。この時期に彼女は、自身の回想記の執筆を行った。さらにパリに舞踊学校を開き、舞踊教育や生徒劇団の公演を指揮するなどして精力的に活動した。第一次世界大戦中はアメリカに渡り、戦火に苦しむフランスやベルギー、ルーマニアを援助する慈善活動に奔走するとともに、ロダンの芸術をアメリカで普及する活動に勤しんだ。

第13章から第15章では、晩年のロイについて描かれている。第一次世界大戦後に彼女は、旧来の友であるマリー王妃の綴った物語『命のユリ』の舞台化を手がけた。作品の初演をパリ・オペラ座で成功させるとともに、同作品の映画化にも成功した。最晩年は、彼女の一番の理解者であったガブリエル・ブラックとともに、特に映画の研究と制作に情熱を注いだ。が、気管支炎と肺炎を患い、1928年にパリ市内で65歳の生涯を閉じることとなる。

本書では、ベル・エポック期から世界大戦へと続く激動の時代を駆け抜けたロイの、これまで一般にあまり知られていなかった、野心的で楽天的、正義感と負けん気の強いアメリカの開拓者魂ともいえるべき自由な精神が手に取るように伝わってくる。著者の山本順二は、自身が舞踊の専門家ではないことに言及し「残念ながら彼女の舞踊家・舞台芸術家としての真髄に迫ることはできなかった」と述べている。しかしながら、本書はロイの波乱万丈な生涯をあたかも追体験するかのように、彼女の芸術家魂に触れることができる。彼女の人間性に踏み込んだ内容は興味深い。

（風媒社、2018年10月刊行）